

堰掘り10年、

発行10年

『たあくらたあ』という雑誌

野池元基

本誌編集長



農家がどんな立派な田んぼをつくらうとしても、用水の水がなければ米はできません。そこで用水の泥上げを農家総出の共同作業で行います。これは無償の仕事です。ここ川中島辺りでは、「堰掘り」と呼んでいます。江戸時代に堰が開削されてから400年、堰掘りは続き、水は滞りなく流れてきたのです。

「たあくらたあ」は、この堰掘りに似ていると思ってきました。社会に対する働きかけの共同作業として。

堰掘り雑誌

本誌の創刊は2004年4月、田中県政の2期目でした。地元紙を中心に熱心な反田中キャンペーンが行われていました。「このまま黙っていられないでしょ。

自分たちの言いたいことを言える雑誌が必要だ」と、森嶽郎さんが言い出しました。それが始まりです。

あれから10年、言いたいことは減りませんでした。3年



前には福島第一原発の事故が起きました。民主党政権は何も変えられずに自滅し、自民党が復権しました。安倍政権はやりたい放題です。社会の流れを健全にする水が至る所で滞ってしまったかのようです。

そんな危機感があるから、本誌に大勢の方々が寄稿してくださったのだと勝手に解釈しています。また、読者のみなさんが本誌を手にしてくださったのも同じ理由だろうとも。

本誌を創刊しようとした当時、商業誌にするという発想も力量もありませんでした。ぼくらは「青人草」という名前の発行元の団体をつくり、当時のメンバー（10人くらい）が1万円ずつ出資し、創刊号の印刷費に充てました。編集作業は編集委員が行い、雑誌として体裁を整えるデザインや印刷所の手配は、地元のある川辺書林が引き受けてくれました。雑誌の現物だけが出版社へのお礼です。執筆者も無償ですし、編集委員も無償で、取材も

自費（カンパはあります）です。かかる経費は印刷費がほぼすべてでした。編集委員が一冊一冊手売りをし、親しいお店に置いてもらうなどして売り、また次の号を発行しました。

14号から出版社は現在のオフィスエムに替わりましたが、全面的な協力をしてもらいながら、創刊時からの発行スタイルを続けています。要するに、無償の共同作業だから本誌は赤字にならずに來られたのです。それが本誌を「堰掘り雑誌」と称する所以なのです。

ともに堰掘りを

堰掘りは自治です。「たあくらたあ」も自治の一つの形のような気がしています。情報の発信はマスメディアに任せてばかりではなく、一住民としての立場から発信していくことが必要だと考えているのです。マスコミがスーパーマーケットだとすれば、本誌は沖縄の共同店のようなものでしょう。情報は産直泥つきです。東京経由の情報ではなくて、たとえば福島へも自分たちで赴き、隠されて伝えられない情報を獲得してきます。取材ばかりでなく、現地での交流もしながら。

わが地域の堰掘りをみれば、高齢化が進み、農家が減り、出てくる人がぼつりぼつりと減ってきています。ある堰では何年も前に農家が1軒だけになり、堰掘りには5人

も雇ってやってきたが限界、田んぼをやめ、堰の管理は市に頼んだそうです。自治としての堰掘りが崩れ始めていたのです。これでは住民も地域も社会への発言力を失ってしまいます。それはまずい。

本誌が10年続くとは思っていませんでした。それでも、言い出しつべの最長老の森さんはすごく元気ですし、編集長は若いし、まだまだ踏ん張っていくつもりです。社会を潤す水が細々であっても、滞りなく流れるように、みなさまもいっしょに堰掘りをしてほしいと願います。

『たあくらたあ』第33号

2014年5月発行